

令和7年度第2回富山県野生鳥獣保護管理検討委員会 議事録

1 日 時 令和8年2月19日（木）14時00分～16時00分

2 場 所 富山県民会館 509号室

3 出席者 大井徹委員長、青野洋徳委員、赤座久明委員、河島節郎委員、中島光輝委員、長谷川幹夫委員、東出大志委員、丸之内美恵子委員、山本茂行委員
(欠席：豊川和人委員、和田直也委員)
(委員名は五十音順)

4 議事概要

(1) ツキノワグマの狩猟期間の延長について

(委員)

推定個体数が正確でなく、実際はもっと多いのではないか。数が正確でないと思われるため、判断ができない。算出方法の見直しが必要ではないか。

(事務局)

個体数調査は、数の傾向がわかる程度だが、一定の調査方法として確立されているものと認識している。環境省では、今後より精度の高い調査を検討していくものと承知している。

(委員)

推定個体数は、全国的に正確な数が出せていない。環境省では、今後、全国統一的なやり方、可能な限り正確な数が出せるようなやり方を検討予定。現状としては、資料で示されている数字で考える必要があると考える。

(委員長)

推定個体数というのは、誤差をはらんでいて、目安としてとらえるしかないということだが、今回の提案は、数を減らす効果を狙ったものではなく、クマを威嚇する効果やクマが人を忌避するようになるための学習効果を期待するもの。数が獲れなくても、山の中で追い払えばいいという考え方。

(委員)

同じ方法で個体数調査をやり続けることにより、トレンドを見ることができる。つまり、個体数が何頭増えたかではなく、例えば、上昇傾向にあるため、少し捕獲圧を強めてもいい

だろうという判断ができるということ。

また、昨年は約 400 頭捕獲し、今までにない捕獲圧をかけたわけだが、その効果測定を行ってからではないか。

(委員)

猟期延長に対し特に反対ではないが、一定の効果があるという説明に多少引っかかりを感じる。岩手県はクマの捕獲が盛んな県だが、猟期を延長しても、狩猟の捕獲は 1 割程度しか増えていない。一方で、全体の捕獲は倍程度になっている。捕獲数が伸びたのは、クマの個体数が増えたためとも考えられるため、猟期延長による捕獲数増加の効果はほとんどないのではないか。

クマを脅かして人里に出てこないようにすることも目的の 1 つという話だが、岩手県の猟期延長前と延長後のクマの出没件数を考えると、延長後の方が多いと思われるため、どれだけ抑制効果が得られたのかは不明。延長してもあまり効果がなかったという結果になりかねないのではないか。

また、クマの猟期を前に延長した場合、銃猟が行われる期間が長くなるため、安全面を十分に考慮する必要がある。山に入る方に徹底的な周知が必要。

(委員長)

威嚇効果があるかは疑問。ただ、立山町長からの猟期延長の提案にあたっては、立山猟友会の意見があったと聞いている。持続的、効果的な捕獲体制を維持する上で、猟友会の動機づけは非常に重要である。立山猟友会の意欲を大事にしないといけないのではないか。

(委員)

猟期延長に賛成でも反対でもない。狩猟技術・文化の継承の意味では賛成だが、それ以外の積極的な理由がない。

傾向を見ながら判断していくべきで、その傾向を探るための基準を変えるのはいかがか。昨年は約 400 頭捕獲したということだが、県民は多様な受け止め方をするだろう。

(委員)

始期の延長は、安全管理が難しいと考える。また、東北 3 県と富山を含む北陸地方とは雪の降り方、積もり方が異なる。クマの冬眠の時期が考慮されているのか疑問に感じた。

終期の延長は、試験的に行うことで、次期管理計画をよりよいものにできる可能性がある。今年度は全国各地でクマ被害が多発しており、連日マスコミ報道もなされている状況において、県として何も対策をしないということは難しいと感じている。住民感情としても、今回の提案は県による積極的な取り組みが実施されると受け止められるのではないか。

(委員)

県では、現在も春頃に個体数調整のための捕獲を行っているはずだが、それを強化するという方法ではだめなのか。

許可捕獲であろうと狩猟での捕獲であろうと、クマの間引き効果や圧力をかけるという意味では、今まですでに行われていたのではないか。すでに行っている取組みを上手く運用しながら、昨年捕獲した約 400 頭の効果測定をするための個体数調査を行ってからの判断でもいいのではないか。昨年捕獲した効果の評価を行わないと新しい対策の評価もできないため、1 年待ったらどうか。

(委員長)

狩猟者が自分の意思で捕獲する狩猟という行為がこれから非常に重要になる。狩猟技術の継承の意味でも、猟期を延長して捕獲したいという猟友会の意思を尊重したほうがいいのではないか。

意見が割れていてまとめようがないため、現行の計画の中では猟期は延長しない。次期計画改定にあたって、前向きに猟期延長について検討する。現段階では、賛否両論で統一した結論が出ないという結論でいかがか。

(事務局)

里山まで降りてきたクマを捕獲した結果が約 400 頭。猟期を延長すれば、奥山での捕獲も可能となり、個体数管理につながる。昨年、クマが大量出没し、人身被害も発生するなど深刻な状況であったことを踏まえれば、クマ被害は人命に関わることから、県としてできる限りの対策を行っていききたい。

始期延長に伴う林業関係者の安全面については、事前に警察に相談をしており、同じような指摘を受けた。周知の徹底は行っていききたい。

(委員)

終期の延長を試験的に行うのはどうか。現行どおりの場合、地域住民や関係者からの強い不安や指摘の声があがる可能性がある。終期の延長の検証結果を次期計画に反映することで、県の積極的な姿勢を示すことができるのではないか。

(委員)

昨年は約 400 頭捕獲したが、ほとんどが里山の捕獲で、奥山に対して対策を行うために終期を延長するというように、組み立て方を変えればどうか。狩猟文化・技術の継承という観点からも終期延長がよいと考える。

(委員)

市町村としても何らかの対策をする必要があるという中で、その 1 つにこの猟期延長がある。少しでもクマの個体数を減らして、人身被害を減らすという点では賛成。

ただ、検証なしにというのは思い切ったことだと思うので、終期の延長から始めるのが良いと思う。

(委員)

効果測定が曖昧のままではいけない。効果測定の結果が悪かったとしても、その結果はよりよいものに組み替えるための一つの経験である。記録に残して、改善して行ってほしい。

(委員長)

猟期延長の効果検証は長期的な傾向を見る必要があるが、短期的には延長した期間にどれだけの狩猟者がクマを目撃できたか、その期間に何頭捕獲できたかという記録が、中途段階の効果測定として有効だと考える。

出猟する猟師の方々には徹底して出猟カレンダーの提出をお願いしてほしい。

結論、猟期延長する方向で環境審議会に諮問するということでいいか。

(全委員)

(異議なし)

(事務局)

対応案は、次回の 5 月予定の検討委員会で議論いただきたい。

(2) 富山県ニホンザル管理計画の一部変更について（加害レベル5の追加）

（委員）

近隣県はレベル5まで設定がある中で、なぜ富山県は現時点でレベル4までしかないのか。経緯を教えてください。

（事務局）

今までレベル5にあたる大きな被害が頻発していなかったため。近年、レベル5にあたる被害が見られてきたため、新たにレベル5の設定、対策が必要。

（委員長）

従来富山県の加害レベルの判定基準表の中にも、環境省が示すレベルの状態についての記述はある。富山県の分類では、環境省の判定基準で示すレベル4と5の境が曖昧になっているということではないか。そこをクリアにして、被害が深刻化する富山県の群れへの対策を明確にしようという意図ではないか。

（委員）

加害レベル5の群れが存在するのは岐阜県のみだということだが、他の近隣県でも設定はされている。環境省のガイドラインでも設定されているのに、なぜ富山県はレベル5を設定していないのか。

（事務局）

本県の管理計画は環境省のガイドラインよりも先に策定されており、当時の基準を現在も使用している。

（委員）

現行の判定基準表は、山間地と平野部とで分かれているが、見直し時も分けて考えるのか。

（事務局）

現行計画において場所を重要視していること、市街地と山際とで環境が違うことから、担当レベルでは、見直し時も分けて考えたいと思っている。

（委員長）

富山市の上野地区のGPSのデータについて、時間はいつか。

(事務局)

深夜1時、6時、11時、16時の4回。

(委員長)

サル泊まり場も含まれており、1日の生活のほぼすべてを人間が生活する場所の環境に依存して生活をし、人身被害を含めた様々な被害を出しているという状況で間違いないか。

(委員)

だいたいよい。

(委員)

賛成だが、平野部と山間部の区分分けをエリアマップ作るなどして、わかりやすく定義してほしい。また、レベルの区分けも曖昧であるため、見直してほしい。

(委員)

加害判定表の改定は賛成。

上野群は人馴れが進んでいるため、相当強い捕獲圧をかけて、数を大きく減らさなければいけない。一方で、しっかりした被害防除対策が取られないまま、捕獲ばかりに目が向けられていることが問題。被害防除、生息環境管理、個体数調整の3本柱が重要。道路から南側の電気柵を行っている農村地帯を避けて、市街地側の家庭菜園を行っているところにサルが移動し、被害が日常化している。上野地区のサルのように深刻な被害状況になった原因を整理して、改善してほしい。同じような群れを作り出さないために、対策の強化も同時に行ってほしい。

(委員長)

群れの数は何頭なのか。

(委員)

50頭前後である。

(委員)

被害管理を怠ると、サルが栄養価の高いものを食べて、数が増え、行動も過激になっていくため、対策をお願いしたい。

加害レベルの追加について特に異論はない。レベル5を作った場合、5に該当する群れはあるのか。

(事務局)

例えば、上野群の窓ガラスを割って柿を食べるといった被害が常習化すれば、5に相当する
と考えている。レベル5を作った場合には、集中的、効果的に対策していきたい。

また、レベル5を作るだけでなく、レベル定義の見直しも行いたい。

(委員)

4が5になるというよりは、判断基準そのものを変えるため、4から3に移るような群れ
も出てくるかもしれないということか。

(事務局)

場合によっては出てくるかもしれない。

(委員長)

特に反対意見はない。加害レベル5を追加、レベル定義を見直すということでよいか。

(全委員)

(異議なし)

(委員長)

対応案は、サルのWGで検討した上で、検討委員会に提案してもらえという認識でよ
いか。

(事務局)

そのように対応する予定。